

コロナ感染前で、安価なクルーズ旅行やヨーロッパー人旅もなんとか実行できました。今回はさまざまな思い出深い海外旅行の中から、台湾鉄道一周旅を紹介します。

5月、LCCとリーズナブルな宿を使い、台北から台中、台南、高雄、そして南回線で台東、花蓮を回って台北へ戻る鉄道一周旅を企画しました。ガイドブックやネットからさまざまな情報が得られますが、自分の感性で生の台湾を体験したかったです。町ごとに違う自然、歴史、文化にワクワクしました。現地の人との出逢いや日本語と英語を交えた会話も楽しかったです。ずいぶん親切にしていただき、忘れられない旅になりました。

特に印象的だったのは台南の国立台湾文学館の2つの企画展でした。「台湾文学的内在世界」は、台湾独自の自然や歴史の遍歴から台湾文学のアイデンティティを追究したもの。被支配の痛みと悲しみを経てなお多民族ゆえのたくましさ、しなやかさをもつ今日の台湾の実像を感じました。また、「ANNE×AMA girls under fire in ww II」は、戦争下の女性などマイノリティの被害を多角的に示した企画でした。アンネ・フランクはいうまでもありませんが、台湾従軍慰安婦の証言は、世界では周知であるのに日本ではタブーとされます。私たちは毎日の情報の嵐の中で、正しい情報を果たして得ることができているのでしょうか。日本を離れて知る事実は、常識や商業主義の価値観を引きずったままでは、何も見えない、気付かないのではないかでしょうか。異なる文化や価値観、歴史認識を、どれだけ自分の中に受容できるか、そんな力量を試されていると思いました。多文化に出会うことは、過去に学び、未来を創るために道しるべもあるのです。



台中駅



台南文学館

## 「台湾民主化の軌跡」について

中國文化同好会 元吉 治夫

6月20日の中国文化同好会の例会にて表記のテーマにて考え方を整理してみました。

私は中国の民主化が先行する台湾（中華民国）の民主化例を参考に進んで行くことを期待もし、長い間待っていましたが、香港、新疆ウイグル、チベット等から聞こえてくるのは民の声は抑え込むという権威主義と軍備の増強による霸道への道をまっしぐらに進んでいます。渡台歴10回以上で、宿泊ホテルで李登輝総統の誕生会に遭遇したこともあります。蒋介石の長男である蔣經國の急死により副総統であった李登輝が蒋介石夫人の宋美齡の反対にも関

わらず第7代総統を引き継いだ流れは国民党規約に基づく、極めて自然なことなのですが誰が構想し、何の為に民主化を執念をもって推し進めていたのか、その触媒となった事柄を歴史の事実に基づいて検証してみました。蔣經國傳、李登輝副総統時代の直筆の手帳メモ、そして20年前直接選挙で選ばれた第九代総統在職中に書いた李登輝総統の原稿「台湾の主張」から読み取れた民主化の軌跡は次のようなことでした。

- ① 蔣經国は「ライバルのいない政党は必ず暴走するか、腐敗する。」との信念に基づく国民党改革、台湾の社会改革への強い意志。
- ② 蔣經国のソ連共産入党時の体験に基づく共産党政治への不毛性の確信。
- ③ 南京国民政府では未成熟だった孫文の「三民主義」を抱卵したまま国共内戦に敗れ台湾に移転した国民党政府の権威主義的統治。
- ④ 蔣經国リーダー世襲（中国の政治文化の基本）に拘泥しない発想。
- ⑤ 「選ばれたエリートが民を管理し、支配する」古来の中国の政治文化からの決別。
- ⑥ 孫文の「三民主義」を台湾に於いて実現し、成熟、定着させることに執念を燃やして決断し、実行していく李登輝の思い。

中国社会の経済及び政治の両面改革の好例はまさに台湾にある。中国の歴史の中で退歩に陥った理由は

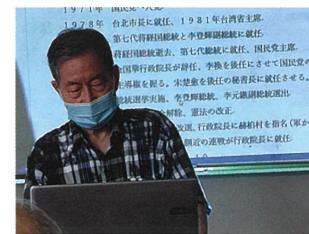
- ① 政策決定が指導者個人のものとなり、国民の声に耳を傾けず行われる。
- ② 社会の構造的変化を長期的に見ることを怠った。
- ③ 指導者が国民の福祉を我が事として真剣に考えてこなかった。

台湾はこうした停滞社会からの脱出を自らの力によって着実に遂行してきた。何故それが可能であったのか？多くの文化、制度、思想を内部に取り入れることが出来たからである。

このような多様性を取り込める包容力を有する政治は存立の危機に立つことがないだろう。中国の民主化の進展には孫文の構想した「三民主義」を曲解せずに素直に原点に立ち返る必要がある。そのためには再びの辛亥革命が必要かもしれない。歴史の過程で有効であった体制がいつまでも民衆に受け入れられるとは限らない。



6/20 講演の様子



元吉 治夫さん

## 牛尾啓三彫刻展～「夢レンズ」制作20年記念

8月6日(金)～10月3日(日)

会場：孫文記念館内庭園及び展示室・舞子公園

夢レンズ関連彫刻、写真パネルなど展示

## 会員交流ひろば

### エベレストに懸けた夢

中國文化同好会 木元 正均

私は1955年1月中国吉林省龍井市八道村に生まれ、小学校3年生の時文化大革命の激しい洗礼を受けました。1972年高校卒業後田舎で3年、工場で3年働きました。大学センター試験が再開され、1979年吉林大学に受かり、同大学と大学院で7年間日本語を学び、大連外国语大学日本語学部の専任講師になりました。1991年姫路独協大学に留学し、日本語語源学会会長吉田金彦教授の下で日本語と中国語、韓国語の関係について研究しました。姫路日本語学校副校長、やえがき酒造（株）国際貿易担当を経て、1998年10月渡米し翌1999年12月まで英語とアメリカ文化を学びました。2002年2月株マルセイを設立し代表取締役に就任し、2007年日本国籍を取得しました。昨年渡利様と出田様のご紹介で移情閣友の会に入会し、中国文化同好会でエベレスト登頂の講演をさせていただきました。

2011年5月20日4時50分、私は万感の思いでエベレスト山頂に立ちました。渾身の力を絞って「お母さんありがとう！」「お母さん生んでくれてありがとうございます！」と何度も叫びました。満天の星がきらきら光りながら私の無事登頂を祝福してくれました。満月に近いお月様が頬笑みながらよくやったと言わんばかりに、やさしく私を照らしていました。

「なぜ山に登る？」は登山者にとって永遠のテーマです。「そこに山があるから」という名言もありますが、私にはたくさんの時間とお金を使って、命の危険まで冒しながらエベレストに登らなければならない理由がありました。私は生まれてはならない運命でしたが、貧乏な中、母の母性愛のお陰でこの世に生を受け継ぎました。父は病気で仕事ができなかつたので母が女の細腕で私たちを育ててくれました。1950年代中国が食糧難で大変だった時期、母はいつも朝ごはんを抜きにしながら先に食べたとうそを言っていました。零下30度の冬の日も落ち豆、落トウモロコシを拾いに山の畑に出かけました。手足のあかぎれに生味噌をすり込む母の姿が幼い私の目に焼きつきました。

大きくなったら必ず母を楽にしてあげると何度も誓ったか分かりません。母を幸せにしてあげることだけが私の生きがいでいた。来日して母を日本に呼ぶ手続きをしている最中に、母は脳出血で倒れました。日本へのビザが下りたときにはすでにとき遅かったです。姉たちのおかげで大学に行けた私は3人の姉と義兄たちを日本へ何度も招待しました。姫路城の桜、京都の古寺、立山の雪の大谷ウォーク、厳島神社、黒谷温泉、東京ディズニーランドなど精いっぱい案内しました。恩返しにはなりませんが、ありがとうございますと言えうれしかったです。しかし、母は日本へ来ることができませんでした。くやしくて、くやしくて残念極まり

なかったです。

2007年52歳の時私は天国に一番近いエベレスト山頂で母に「お母さん生んでくれてありがとう！」を言おうと決心しました。2年半で日本の100名山と3000m以上の山を踏破し、さらに1年半で6200mの玉珠山、7500mのムズタグ山、8200mのチョオユーに登りました。そして2011年56歳の時私はエベレスト初挑戦しました。すでに300人近くの方々がエベレスト挑戦で亡くなっています。チベットルートの8300mの最後のキャンプから山頂までの間に18の遺体が登山道に横たわっています。切り立った断崖絶壁を横切ったり、よじ登ったりするときは、髪の毛が逆立ち、足がすくみます。先祖様の守りと家族の祈りのおかげで私は無事登頂成功し、この地球上では天国に一番近いところから、命がけで私を育てくれた母に全身全霊で感謝を捧げました。



エベレストへの道のり



エベレスト山頂

### 私と移情閣友の会と中国残留孤児支援活動

（帰国者公墓と記念碑）

中国「残留日本人孤児」を支援する兵庫の会  
世話人 斎藤晋

私は、移情閣友の会入会以前から、孫文記念館や神戸華僑歴史博物館へよく行きました。明石大橋建設工事のため、一時期、舞子公園内に移設されていた記念館には、18回目の神戸訪問、県立神戸高等女学校での「大アジア主義」講演を終えた孫文が神戸港から長崎・天津を経て北京へ向かう瀬戸内海の船のデッキで、数名の若者とともににくつろぐ孫文の写真がありました。その中には朝日新聞記者太田宇之助（1891～1986）の姿もあります。2019年11月孫文記念館開催の「太田宇之助の見た中国と孫文」特別展を見たとき、ここにこの写真も展示されればよいのになあと思いました。「日中戦うべからず」という信念のもとに活動した人は、日本側にも中国側にもたくさんいたと思いますが、太田宇之助もその一人です。

私が所属している中国「残留日本人孤児」を支援する兵庫の会（以下支援の会と略す）は、2007年3月3日に成立しました。前年2006年12月1日の神戸地裁勝訴判決を受け、控訴審などに備え、支援体制を